

# 長崎實錄

十三十四

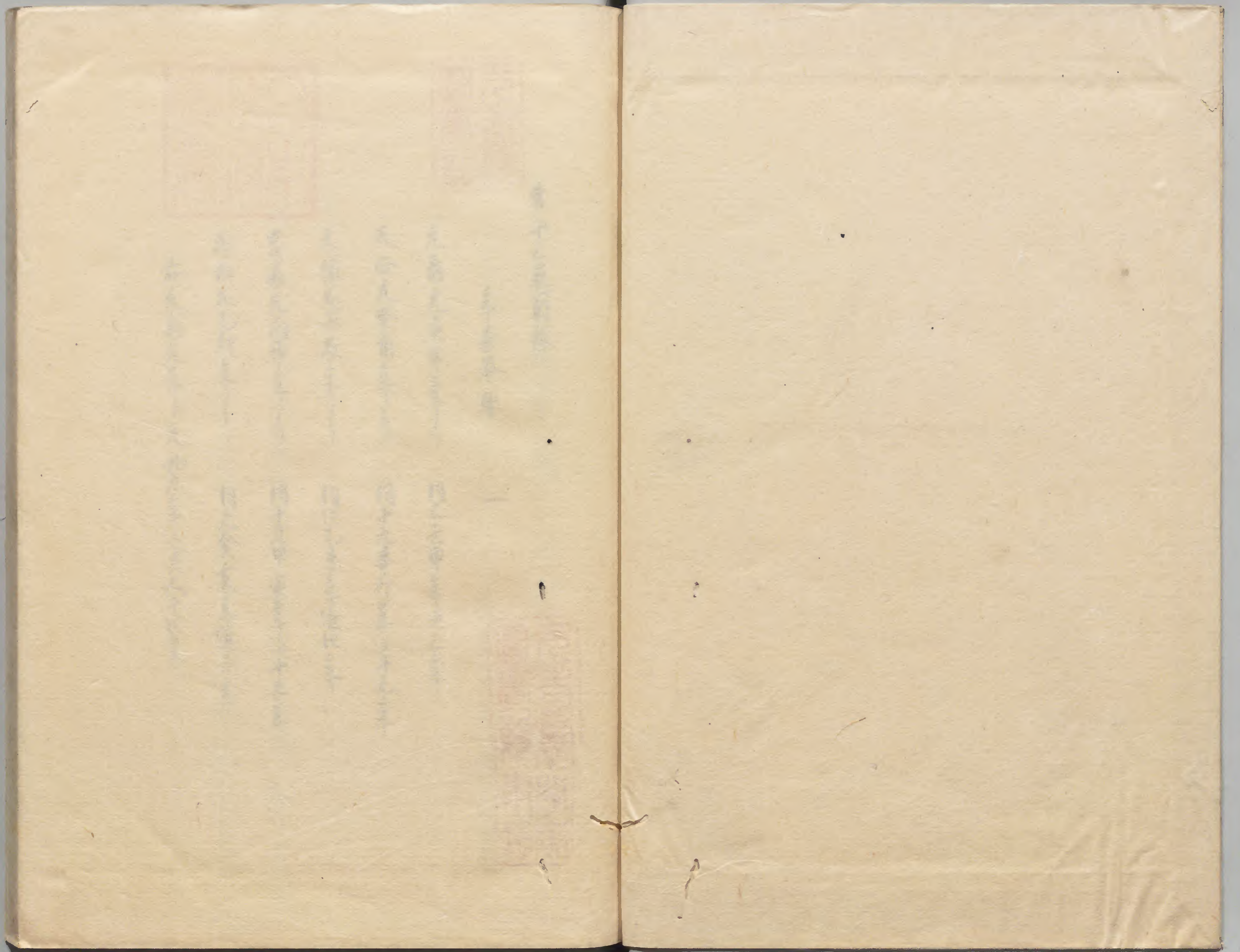
和書門類			
八冊	三架	九函	八六二號

內閣文庫		和書
毛函一册	八六二號	

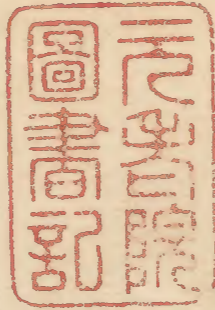
內閣文庫		
番號	和	8862
冊數	8 ( 7 )	
函號	176	100











中十三卷目錄

年表卷要

元龜元庚午年より

同三壬申年迄二年

天正元癸酉年より

同十九辛卯年迄十九年

文祿元壬辰年より

同四乙未年迄四年

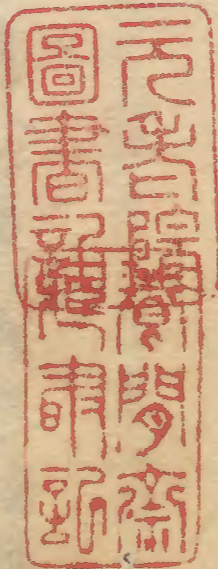
慶長元丙申年より

同十九甲寅年迄十九年

元和元乙卯年より

同九癸亥年迄九年

右元龜元年より元和九年迄共二十四年







一 長崎實錄大成卷十三卷  
 一 長崎實錄大成卷十四卷  
 一 長崎實錄大成卷十五卷  
 一 長崎實錄大成卷十六卷  
 一 長崎實錄大成卷十七卷  
 一 長崎實錄大成卷十八卷  
 一 長崎實錄大成卷十九卷  
 一 長崎實錄大成卷二十卷  
 一 長崎實錄大成卷二十一卷  
 一 長崎實錄大成卷二十二卷  
 一 長崎實錄大成卷二十三卷  
 一 長崎實錄大成卷二十四卷  
 一 長崎實錄大成卷二十五卷  
 一 長崎實錄大成卷二十六卷  
 一 長崎實錄大成卷二十七卷  
 一 長崎實錄大成卷二十八卷  
 一 長崎實錄大成卷二十九卷  
 一 長崎實錄大成卷三十卷



長崎實錄大成卷十三卷

田色八右衛門茂啓編輯

八年表卷第一

元龜元庚午年

義昭公即位世

一 今年長崎渡南蠻船始有長船と去し天文十二年隅州、長岸以屋凡

一 諸處に來り、此向度此地を渡海の邊に定ぬるに大村氏不能所しと

中七卷小  
とあり



元龜二年未年

一 今年も南蠻船差遣し去年能入し統大村理与許諾あり二月家来

友永對馬を遣し當表小地別を初る云町出束中一巻小

一 今年も南蠻船差遣し去年能入し統大村理与許諾あり二月家来

一 今年も南蠻船差遣し去年能入し統大村理与許諾あり二月家来

一 今年も南蠻船差遣し去年能入し統大村理与許諾あり二月家来

元龜三年申年

一 當表小近國の高人為從來して交易を成せり船と蠻人も我國製作の

物或は令彼材實を法人小与或は并具の技術を思氏小とせ自造と

已ヨシうヨシ小信法威をヨシとヨシのヨシ高橋を設ヨシるヨシ巧計を成ヨシりしと中七巻小

天正元癸酉年

信長公茲處意向は勝利義昭公惣長利發号昌心

一 蠻人年と渡海して法人小思取を施しを機を察て切支丹の法を引入神

道佛法を誦誦し切支丹寺を造立し本崎の地を占領し形をとりて

理考始に承引せしむる蠻人等種々雅類を以てし故彼小の理考も許

容を以て此地を占領し相与一り割當地の諸事被控たれ申入て逐日邪



宗ノ發皇の地と成来りし中七卷小

天正二甲戌年

一 主以信長公の命を以て近年長崎の地、豊國の異人渡来して奇妖フニキ不測の  
法術を成すの危言とせしむる信長公聞て急死之志を可連來の命  
派して彼吳人江州安土の城を築とせ彼を種々珍奇の寶物等々を然として信目  
見出御付所の洛陽江條坊の通り之地と流る南臺とを命遣はる中七卷小

天正乙亥年

一 今年信長公の命を以て長崎小坂來し蠻人を殺多系絶て誓を彼南臺と  
小倉在流る所又子貴を流る彼之彼徒益志を得て切支丹の邪法を弘め年月  
小僧の出家内及の詠國の愚民亦邪宗の小僧に信心を成を甚多く成  
行中七卷小



天正己内子年

信長公任正三位右大臣

天正丁丑年

天正乙亥寅年

信長公任正二位右大臣

天正七己卯年

四月七日秀忠公治政

天正八庚辰年



天正九年

天正九年己年

一 年月を經る小通る法氏ハ不及云大谷高景以下地改代古事小通る迹彼切  
 支丹の邪法を信用するを深限せしむ信長公法明を及ねし佛法ハ  
 檀那の御相未を推け教を更る習ひ多し彼流ハ檀那の御相を多し厚之恩  
 惠を能くハ必定已味分を設て逆小ハ他の國古を奪ひハ之に謀半成ハしと  
 大由後悔ハ在て此の南蠻と破却し靈僧未を罪科小行ハしと甚念激  
 成ハし是法團兵乱の御事ハな程ハと云先ハ重ハとハ中七卷小

天正九年

天正九年

天正十七年

六月百發系御明經日向寺奉教信長公信忠公申書同十日日於山崎秀吉公  
 討滅日向寺

天正十七年

天正十七癸未年



天正十二年

天正十二年甲申年

秀吉公任從三從大納言

天正十二年乙酉年

秀吉公任從三從大納言同奉任國白叙從一從政姓豐后

天正十二年丙戌年

家康公任從三從中納言

國白秀吉公任大政大臣

天正十二年丁亥年



一 今年秀吉公傳津為依成九州小島向在し帰陣の御氣不博多格と頭  
 智成しぬ長崎の政人を治身人為能博多おし小島礼のゆきと彼を  
 年来南蠻船をわき切支丹の邪法と信作て神戶公法と欲討し當社を破  
 却とし此信開小達し甚く不法無恥とて多度追返され長崎表小島を  
 統後をば是を之れ邪法と信作し其信條目をぬ法治後傳天連を  
 おし可合帰國を法治せし 中一巻小

天正十六戊子年

一 今年重なる寺澤志摩と友黨統後と為人當是法是哉長崎を治  
 料取ぬ法治地子治免除の治来下し編り為治成友福為飛陣と  
 長崎を治け重なる是の長崎中々毎年頭人自一人免出府し年以の  
 法礼相勤之 中一巻小

天正十七己丑年

一 年来京都南蠻とて控て切支丹の邪法を治むるのを秀吉公法開を増田  
 右衛尉小島治村に東坊の通り南蠻と為破却軍兵子余人治是を



仍曰邪佞三人之落也也人ハ搦捕ハ長備小相後ハ南臺与ハ燒拂 以終討  
是ハ我内法因信能之也法人急度可合改宗の免嚴密ハ如何

中七卷小  
とくり

天正十八庚寅年

秀次公任國白 秀吉公稱太閤  
一 今 秀吉公稱太閤 秀次公任國白 秀吉公稱太閤

天正十九辛卯年

秀次公任國白 秀吉公稱太閤

文祿元年辰年

秀吉公任國白 秀吉公稱太閤

寺澤志麻呂 長崎治事行始

一 今年秀吉公朝鮮為征伐唐津名護島 治在陣也 長崎中 乃家治  
機娘村山東安化名次子是子 乃机首尾能相勤之節 長崎治代官



治を専らし 才一卷小  
之り

一 以御下治来平を治り日本を唐国外國為高貴渡海治免之且又  
近年以来唐船九州往來甚多一々高貴を相逐る 同前

一 去元龜二年今年来近所較二十二所出来但此所較八地子治免除の地  
内切と移り 同前

文祿二癸巳年

寺澤志平

文祿三甲午年

寺澤志平

一 京大坂を捕至し津天連六人黨執二十余人長崎小送來斬罪之 中七卷  
之り

文祿四乙未年



秀次公能高望山生雲

寺澤志麻呂

安長元丙申年

家康公任内大臣

寺澤志麻呂

安長二丁酉年

秀吉公再征朝鮮國

寺澤志麻呂

一 昔表逐年繁榮し後居たりて云々成り故田畠の地小町割を初今年秋

本町邊所酒正町出来し以後年々町敷之廣の定免の地子課を可令

上納を以て依付以後以町敷を外町と稱す 中一卷小







一 今年泉州の浦、阿蘭陀船始に参船也中八巻小

慶長六年丑年

与次志广守

慶長七年寅年

寺澤志广守

慶長八年卯年

家康公征征夷大将軍

秀頼公征内大臣

小笠原一庵

一 今年初自付彼太人石抱らるる屋河使と名付る



慶長九甲辰年

七月十八日家光公御誕生

小笠原一庵

一白宗正光寺兼

慶長十し己年

秀忠公征伐大將軍

小笠原一庵

一 今年如何なるかの馬依理吉史船一艘廣南小笠原より其の英國  
 渡海して初より小笠原難風を避けて阿媽港に漂着し其處に大船  
 押入り船中の人数を殺害し其船を奪取し其船中依理吉史船を  
 阿媽港に船渡海する時一艘討たれて其船を殺し其船を討た  
 其船を討たるといふ事

一 長崎郷地東(日見崎)を分けて南(田上)宿近西(長崎村)を渡り大村郷に  
 入り東安治郷地小笠原地に入組て其後日見崎より可成り之を東安  
 治郷大村郷地を渡り日見崎浦と古橋より西小笠原小川より



小の方面村と云ふ事二百石余東安の先出し昔年七月吉辰迄の事  
より山田権左衛門大村の友永跡意を馬御理定より石末女入江七  
右馬東安方の松尾拉監右人出合逆叱俵俵と入相續也

慶長十一丙午年

長谷川九玄東

慶長十二丁未年

長谷川九玄東

一 佛諭威福院天満宮社を創建

慶長十三戊申年

長谷川九玄東

一 今年河媽港の鹽船一艘長崎湊來着て佛理堂を以て府國之古帳と解



灰を日と能く長崎小島を砲撃す小修理美成内古氏小邪宗の言を以て  
以航を賣人小田通と有り仍る賣人を急死状相儀具を船小のせ出帆の支  
度を成す折節東北の逆風を以て帆を打揚て海と遠く決り出たり修理美  
早速兵船小取より追を以て大船順風を以て殊更日暮小及るを以て追  
付候もろく定更亦有り居る小船小田通の風吹揚る彼賣船沖の言  
より遠のりて去りハツサカサニ小吹庄され香焼船の外海小島へ来て彼を即ち船  
中周を相度火矢銃砲を殺多由へ重たれタヤス輒てを付やうもせし後之  
る馬込香焼船の内海より外海較十間の地を日夜に通過し小船焼草を  
多く積りてのせ賣船の撃り居る日暮より急小漕付け火を放りては彼賣  
船モト燃付く所くは方術もろく一船急焼亡し賣人を多所溺死たり修理

皇恩の修小此を結して帰城せり。

或は小賣船吹庄されし時修理美自身彼船小乗取り賣人をこぞ討  
捨らば小船中殄れし程で塩漬の意火槍を以て一船忽ち破裂し船中の意  
小所焼死たり修理美は船具小丸付ぬ我本船のり候り危死命を直れ  
歸まりて評曰船中周を相度火矢銃砲を海へ重たる容易く賣船小  
乗取りの甚難くは此の如くは是塩漬火槍を以て一船破裂し賣人を  
焼死する程なり修理美人数も安穩小道を通りて此の理を以て航を  
信用し難し能今を歸城切し候あり

一 今年平戸小阿蘭陀船差居たり才八巻小



長長十比己酉年

長長川九玄書

長長十五庚戌年

長長川九玄書

長長十六辛亥年

長長川九玄書

長長十七壬子年

長長川九玄書



慶長十八癸丑年

長谷川九玄書

慶長十九甲寅年

長谷川九玄書

一 今年兩宮檢在東門前表之表之去年以來法團之捕重札し律天連の書

數百余人長崎小送來所鳩港に流刑に依付之 中七卷小

一 同年山口渡河に當表之表之長崎地内を建並し切之丹与十一本を團

大石家之依付當表法以具与悉く ウチウチ 碎片焼捨し依付之 日新

一 白字大光与建

一 白字光永与建

元和元乙卯年

六月七日大坂蕨城秀村公出書



長谷川権六

一 禅宗昭慈寺建

一 白米源宗寺建

一 滝野大賢坊建

後年改  
本堂古

元和二丙辰年

四月十七日家康公亮治極號東照大権現

長谷川権六

一 今年長崎治代村小東安末次年意と海防の事と於江府治金後

と上東安法斬罪之跡治代末次年意最治之 中一巻子

一 同年長崎表小浪産取表を立子代を差越是國之戻吹浪と相後似  
浪未為吹味相後との浪取治免あり

一 同年長崎表朱産相立子代を差越唐阿園地持後朱砂光明朱未

を賞九但朱産する朱の小賣後一切地方を賣買と後治浪取治免あり

一 長谷川延命寺建



元和三丁巳年

長谷川権六

一 今年河内院船津天連を急居りて唐船を引つて来りて穿敷之船

一の志重科小行り中七巻小

一 海古宗大音寺建

元和四戊午年

長谷川権六

元和五己未年

長谷川権六

一 今年河内院役口人相増

元和六庚申年



長谷川権云

一 法義宗本蓮寺建

一 唐寺自福寺建

元和七年丙午

長谷川権云

一 海去宗法泉寺建

元和八年壬戌年

長谷川権云

元和九年癸亥年

家光公任征夷大將軍

長谷川権云



一 去言宗隆水寺表  
一 海古宗三亥寺表

右元龜元年乙亥和九年迄共二十四年

中十日卷目錄

年表奉要 二

寛永元甲子年より	同日癸未年迄二十年
正保元甲申年より	同日丁亥年迄四年
慶安元戊子年より	同日辛卯年迄四年
承應元壬辰年より	同日甲午年迄三年
明暦元乙未年より	同日丁酉年迄三年
万治元戊戌年より	同日庚子年迄二年
寛文元辛丑年より	同日壬子年迄十二年
延享元癸丑年より	同日庚申年迄八年



天和元年同年より 同三年迄三年

右寛永元年と天和三年迄共六十年

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

長崎実録大成中十回巻

田島八右衛門茂啓編輯

年表挙要 二

寛永元甲子年

二月晦日改元

長谷川拾六

一 當年合重院張子の神社再興に議を起すの由長谷川氏利に府に可法

言とて免状仰願之 中口巻小

一 海士宗海安寺建

一 依願常樂院建 後年改 神宮寺



寛永二乙丑年

長谷川権六

一 去年金重院神社再興の儀に逢 上聞の如く下知をて社地を造り

一 別之社を同殿小紙祭をて由組以地の後年天満宮を遷座成し奉り松

森と稱するの地中田巻小

寛永三丙寅年

水野河内守

一 水野氏今將多所を在せし天満神を厚く崇信をて去地の淨の宮居を造

一 當在し大服御禮をて云ふ小社職を勤中田巻小

一 今年切之丹所人囑吃祿三百枚を奉る

一 天石字觀慈を奉

一 海古字重徳を奉

一 一向字觀若を奉

一 三言字體性を奉

寛永四丁卯年



水野河内

一 唐國陳明徳と云ふ後來り日本後居を和歌小付治免とて姓名を改穎川入  
徳と改醫業を勤む

寛永六戊辰年

水野河内

一 今年淡田氏兄弟竟濟小海の所蘭院人を先捕來す  
中十二卷小  
と云り

一 唐寺福海寺建

寛永六巳巳年

竹中采女正

一 唐寺山宗福寺建

寛永七庚午年

竹中采女正

一 大坂下邪宗の乞食七十人長濟小送來呂宋、流刑治治付  
中七卷小  
と云り

一 禪宗玄徳寺建



寛永八年庚申年

竹中采女正

一 今年引地町高町使在九軒敷使在二町森

一 法善宗長照寺建

一 海去宗龍剛寺建

寛永九年壬申年

正月九日白秀忠公亮治福院台徳院殿

竹中采女正

一 福方社金重院又子と系し初め吉田門中子相成金重院宮司と宮内去攝

神皇正統記 卷之五

一 白宗西勝寺建

寛永十癸酉年

曾我友左衛門

今村徳仁郎



一 今年の御事所治おんあしり是迄の御事所を二つ分るの如し今村氏方  
出火するあり爰に小焼亡中二巻小

寛永十一甲戌年

柳原花彈守 昌我氏始

神尾内記 今村氏始

一 今年も御事所治神事相始り治後不神幸と外治事礼首尾令  
相調中四巻小

一 南蠻人為て花並今年も出御候中七巻小

一 長言宗弟福寺始

一 社僧夏泉始

寛永十二乙亥年

柳原花彈守

仙石大和守 神尾氏始

一 向後唐船名濟濟一方に後海し地處に從來より奉一切治停止と有法  
治後中一巻小

一 次長東上云邪宗の志欠後せし小付包圍に治治越九州佐處に國不



后継来切子を以改より始中七巻小

但以去平日金銀の服指を差ふる故是名に金銀次を以て云内十日丁丑年六月  
所入をて正補

一 今年町役役口人相増之

寛永十三丙子年

柳糸花彈

馬場三郎左衛門

仙石良盛

長船

一 向度日本が異國渡海一切治停の由治出是切支丹治制禁を外教分條

と紙法治停之中一巻小

一 今年分長船前役之節公儀治檢使是切支丹の始

一 出傳取處當徳成就小付當年南蠻人を入所令在伝中七巻小

一 南蠻人去所出中の積子男女三百八十七人河媽港小流刑と傳付日葡

一 去々長十三年香焼の外海を燒討をし南蠻船を積長より銀二子

六百貫目後海庭小付と申長崎の好運京師の水字以商人主を以て取

揚交名能と申傳免小付と申の旨御と仕をの意を以て銀六

百貫目余九揚と申此れ商人争論の中出来と成九揚と申止

せり



寛永十回丁丑年

柳永花彈と

お人左十二月六日名所と

馬場三郎左衛門

同七日馬場表出陣

長崎法事行是迄(毎年六月下旬長崎と共し南蠻船瑞帆以後十月下旬瑞  
 府より瑞帆今年十月の改より瑞永天草切立丹の條黨を馬場村系乃  
 故と云古跡を九立一揆を瑞永より瑞永松倉氏在府より瑞永老  
 是を割し先と欲せられ中より及難に故細川瑞永お家と加藤を去り瑞  
 隣國如河の事も在瑞永知りして人殺せ先向瑞永天下の治法をこれ  
 お家も國境迄出陣し加藤如何と瑞永より瑞府より瑞永瑞永瑞永

引如く名を(為と)は板倉内膳正石谷千蔵は瑞永向十二月初に馬場表と共  
 陣より細川瑞永お家と馬場表松浦法家為とは一揆を瑞永急に可  
 瑞永陣より瑞永知り瑞永名軍勢を瑞永瑞永馬場表向瑞永長崎法事行も  
 在府より瑞永と共先瑞永長崎と共瑞永馬場表出陣し柳永氏(瑞永氏)  
 加り馬場氏(細川氏)加り

唐船

一 今年瑞永社石の大倉居連正月十九日石工車始り八月成就と組立瑞永  
 町より人丈二子人先也

一 薩方より南蠻船一艘連六人日本人三人送來中七巻小

一 去年欠落の次表片割村と瑞永斬罪と



一 十月、西原陣、下入用の中、明流大板帆船二艘、長崎と右側、破地、流原陣  
所、小右衛門

一 一向宗、光原寺、建

寛永十六、改、寅年

柳原、花、彈、与

西原、表、敵、年、長、崎、長、崎、府、役、候、治、免

馬場、二、部、在、り

右、白、の、長、崎、長、崎、府、役、候、治、免

以、年、の、以、後、長、崎、常、治、在、勤、と、り、同、年、と、力、の、跡、同、公、二、千、人、と、治、免、と

唐、船

一 當年、の、治、免、行、不、為、治、免、町、人、の、目、の、年、行、り、為、人、免、治、免、と、り、免、口、迄、在、り、り、内、也、助、九、也、り

一 正月、重、下、と、使、松、平、治、免、と、り、田、丸、の、東、の、城、小、免、向、り、又、水、野、氏、治、免、二

月、九、七、日、九、日、西、原、一、揆、長、崎、と、り、城、中、男、女、三、百、七、十、餘、人、と、り、治、免、討、檢、大、將、也、部

右、免、小、右、衛、門、監、初、之、人、の、首、長、崎、小、右、衛、門、前、長、崎、首、と、り、中、七、卷、小、右、衛、門

一 去、免、の、西、原、表、在、陣、と、り、節、入、用、の、治、免、長、崎、と、り、相、觸、り、の、治、免、不、治、免、と、り、治、免、

高、百、十、一、貫、六、百、九、十、三、を、余、小、目、録、九、と、り

一 唐、船、造、の、船、口、艘、長、崎、小、右、衛、門、と、り、一 石、火、矢、銃、炮、の、候、免、後

一 玉、葉、一 指、板、一 官、繩、荒、細、川、一 大、工、一 船、治

一 花、脚、等

右、と、り、入、目、録、三、十、三、貫、九、百、九、十、目



一 長崎地卜人月石火矢打之志小下先

銀百枚

濱田新巻

銀六十枚

大永十九巻

月三十枚

鴻巣市丸巻

日三十枚

葛原与久丸

日六十枚

子傳之志

日五十枚

子傳之志

一 長崎出立者之志百人持持銀六十石八斗四升六合

但去五月六日當寅三月日追お修

以上

一 崎京一揆退治以後松平作意と當意は之紙流札見分と上野舟并烽火山指番

新立連 中二巻小

一 去乙年小南蠻人出地内之先重之れ今年古田海中と當意は意向を

向後南蠻人日本渡海一切治制甚之と厳密に治治後在苗の南蠻人一人

と沙汰追返す時出治明を交と也 中八巻小

一 當三月九日崎京落城以長崎京氏に就江府治後治先関門を治付後

有治敏免と象治之馬場氏に崎京落城以後長崎小来是是分也長崎

常在勤之也

寛永十六巳卯年

馬場三郎左衛門

執筆

大河内若玄東

棟原氏範



唐船

一 今年彼獲南光院船別名官所て當地月津縣大神宮所積而を建中二巻

一 飯分社二名辰本を建中二巻

一 昔後内出用船二艘完肥後徳宗天皇からたつた船を名に取船之中二巻

一 今年南蠻船三艘入港し仍の上邊井上飛屋と昔者名を向る去年後海為船

船之名に後海と船押を相渡しの後急を治法をてし船名に改定進へし先之

間より帰帆し重なる後海は名を相渡し治法をてし船名に改定進へし先之

し緒厄利亞人の種子六十人賣國に相渡し中七巻下

寛永十七庚辰年

板橋平右衛門

大河内良経

馬場三郎左衛門

唐船

一 六月十七日南蠻船一艘入港しと後加し既民部次補當者名を向るを商人

が斬罪を向十二人助命を法令海國船へ出焼死之中七巻下

一 薩摩の津天連五人切支丹の日本人二人送來日家

一 河内院船向後長崎港にて令入船名に即後中八巻下

一 修験金別院建



寛永十八年己年

八月三日家徳公出陣

馬場三郎左衛門

元年

板橋平右衛門

河内院船九艘入陣

唐船

一 當年松平右衛門流浪上三田泊之所為古書不詳之

一 河内院船當年古書云在崎濱入陣也中九卷云

一 去書宗長福寺來

一 院驗曹秀院來

一 同南光寺建

寛永十九年壬年

板橋平右衛門

元年

馬場三郎左衛門

河内院船六艘入陣

唐船

一 當年鴉崎信濃与家 上三田泊之所為古書所載前と隔年可法



相勤名証家証之 中二巻

一 今年市中法取之 抱女証証引移九山町寺合町出来 中二巻小

寛永二十癸未年

馬場三郎左衛門 秋年

山崎権八郎 拓植氏始

阿蘭陀船八艘入港

唐船

一 飛前南蠻人十人送来 中七巻小

一 奥州南越浦邊之 阿蘭陀人十三人江府に法相送許礼の甲必丹法引合之月

夫人江府に帰出法引八人甲必丹連帰 中八巻小

一 去言宗航歳寺建

正保元甲申年

十月十六日改元

山崎権八郎 秋年

馬場三郎左衛門

阿蘭陀船八艘入港

唐船



一 在津之唐人切支丹の訴人小出十二人の目三ノ目明小出治行二人八秋中多死し

七人の訴最也中七巻小

一 去古宗聖堂勸寺建

一 禅宗禅林寺建

一 同宗徳苑寺建

○ 昔年明朝亡て清朝建國號世祖即改元順治

正保二乙酉年

馬場三郎在馬

山崎権八郎

阿蘭院船七艘入津

唐船

一 飯分社二の島居今年石を建也

一 天台宗安禅寺建

一 天台宗普光寺建

正保二丙戌年

正月八日徳吉公出陣也



山崎権八郎

元年

馬場三郎左衛門

河内院船六艘入津

唐船

一 去年寛永十六年修築大神宮治行橋本坂治宮建立今今年修築河川橋

一 去年修築河川橋地を寄附する七月所始十月遷宮成し事中は巻子

一 今年豊臣氏御遷居後河内山子岩東村の地八幡大神宮社を勧修し日本

一 禅宗永昌寺建

一 同宗三林寺建

一 同宗光雲寺建

正保丁亥年

馬場三郎左衛門

元年

山崎権八郎

河内院船六艘入津

唐船

一 昔年玉園山に地を寄附する十月修築車馬中は巻子

一 同年重賞創建する向井元平小附属日本

一 六月九日南蛮船二艘入津其の四國大名流儀小軍艦兵船を殺多法











一 甲必丹江府沐札由年三相叶之札出候味之上出候言之状相之書表下

古札相動亮去秋河内院使之船渡來り是又一而古札相動也 中八巻下

一 十月十七日山崎氏卒去書表之件上最英法節功之忠告也 中八巻下

一 十月九日古飯言社更殿新始也 中八巻下

慶安四年卯年

四月九日家光公亮古福號大歌院殿

家徳公任証長大將軍

一 馬場三郎左馬 中八巻下

馬川与云束

山崎氏

河内院船八艘入陣

唐船四十艘入陣

一 八月十九日言社更殿成就し正遷宮也 中八巻下

一 檢驗泉良院建

承應元年辰年

九月十八日改元

馬川与云束

辰年

甲斐左兵衛

馬場氏



河内院船九艘入津

唐船六十艘入津

一 今年浪江刑部所拍町地内、水神社建中口巻小

一 兼意二癸巳年

甲斐元在在東 敏年

馬川与云東

河内院船六艘入津

唐船六十六艘入津

一 今年松浦肥前守家上意倭内外七ヶ所石火元意倭築中二巻小

一 七月七日福依と摺煙の唐船一艘焼失中十一巻小

一 唐焼の外海と焼討の南雲船中根寛永十三年以船の志有人九揚

と船と許有人事備のゆとと小付ねとと張並の机今年所田市在東と

云云ね船小付治免とと又と少荒方船中在當年今数年と同三百貴

目余九揚と出と泥海と成り難取揚中と相止組根子七百貴目余于今可

一 禪宗雲龍と建



兼寛三甲午年

馬川舟云勝 秋年

甲斐庄舟云馬

阿蘭陀船一艘入港

唐船六十一艘入港

一 七月廿日唐船八艘元和尚後海侍詣千人を遣り奥福寺に在りて

申云卷

三つり

一 明曆元乙未年 四月廿二日改元

甲斐庄舟云馬

秋年

馬川舟云勝

阿蘭陀船一艘入港

但入港近引舟依航九月廿日出帆

唐船四十二艘入港

一 今上云今年城所定海船之費障山系福寺開創を去年後海の港元和尚

令渡藏らるる諸船の内十人の附添也山系福寺十人の今年唐船を

申云卷

一 去年より當差追唐船一艘出帆相滞舟付る船祭唐人は船を

バイロ

競渡を成るは後市中の志を足習て年々バイロ船と唱へ小船一艘を

進て擢を授けたる是後速速を競て船祭の式を成る



明曆二丙申年

黒川年表

元年

甲斐文庫右表

河内肥前八艘入港

唐船五十七艘入港

一月十日と振出肥前唐船八艘入港為古所無於此有社唐船云々中七巻

二月十七日暹羅船五隻九艘一艘入港中十二巻

一 今年天満宮社松の森の地に古遷宮云々中七巻

明曆三丁酉年

甲斐文庫右表

元年

黒川年表

河内肥前九艘入港

唐船五十一艘入港

一 當表利左衛門と云々大村殿小切土丹一様右邊との所入云々中七巻



新治元成元年

七月七日改元

馬川与云束

元年

甲斐文彦在馬

阿南院船十艘入津

唐船四十二艘入津

一 六月廿日旨意渡國姓節方より使名船一艘入津也 中十二巻

一 修驗大行院建 後年改 大行寺

新治二己亥年

甲斐文彦在馬

元年

馬川与云束

阿南院船八艘入津

唐船六十艘入津

一 松の妻天満宮神社馬川氏寄附より造管成就小付九月廿六日遷宮也 中四巻

一 遠見唐人船十人馬石抱十卷与村海子長尾十斬出来 中三巻

一 今年當表米穀拂度より及川儀小付甲斐文彦氏法處所代取而米

當表より取上り候所御致進上り也

一 米二子石除

小笠原信流等

組是前所取り而

一 同二子石除

松平市正

組是後所取り而



一月六日余餘

治代友  
少川友九郎  
因又友九郎

米高合一百七十七石七斗二升  
此外近國大名より米廻送あり  
地下中、洋儀より得付之

明治三庚子年

思川与玄忠 紙年

青木友右衛門 甲斐庄氏殿

阿蘭陀船五艘入港

唐船四十六艘入港

一 幕府の阿蘭陀人詰宿當年追口年功回之三度合船號收来也  
幕府の令出也二月申の府可令幕府より御付之  
中長崎の令出也二月申の府可令幕府より御付之  
中長崎の令出也二月申の府可令幕府より御付之  
中長崎の令出也二月申の府可令幕府より御付之

寛文九年丑年

四月九日改元

青木友右衛門 紙年

思川与玄忠

阿蘭陀船十一艘入港

以日二番船三番船の意渡り方以追出之申

唐船二十九艘入港



一 今年小江府津礼の甲申丹心月十六日當表出立を以て後定例に由り。

一 薩平古唐人九人送來但洋中を河内國紀伊の海城に遊りし事（九卷）

一 將軍振治死後治世氣為治統紙如所並通事中小跡を以て治世行取成とす。

一 今年東新三節と云ふ小嶋村の内八飯大明神社建（東白巻）

寛文二壬寅年

四月九日自家宣公治誕生

島川与志 秋年

河田久右衛門 書本氏宛

河内紀船八艘入津

以月日為船修慶小付九月九日自出航

唐船四十二艘入津

一 今年當表疫疹大小流行し許多子嬰兒夭折も海上一の激街道の濱石垣を

築立松坪程の地内、法華経塔一基を立石塔長七尺方三尺六寸當表在

此の唐僧即服和尚偈文あり其蹟の北林岩崖岩屋等筆書を同年

七月十六日建公所惣所相造り給あり是を其縁塔と稱す

○當年治重祖即治政元康熙







但との町一回百廿一を九下口厘六毛宛

中の町同九十七を中下口厘七毛宛

下の町同七十五を一分六厘六毛宛

同二百字二費六百目

寺社二十三ヶ年

一 去ル寛永十七年西泊船スル所の海とる荒況を以て南蠻船の浪及具等九  
と取危航し毎浪免下付此をの方術を以て浪六十費自後を外金道具  
の取れ揚。石火矢は救れとしと業作と又二解方。古航付也。

寛文甲辰年

馬川左左衛門

延享十月九日發書

嶋田久左衛門

九月十八日迄

阿蘭陀船八艘入港

唐船二十八艘入港

寛文乙巳年

嶋田久左衛門

延享九月廿八日發書

福中七郎左衛門

馬川左衛門七月廿九日迄

以時左左衛門十騎目心三十人々々々



阿蘭陀船十二艘入港

唐船三十六艘入港

一 六月廿日阿蘭陀一船出火 才九卷小

一 今年時の鐘は来し八月十日徳兵衛の内鐘撞不送管成就 才三卷小

一 八月翌早出現牛長一町程小兒の東へ西へ廻り月を敵へ消す

一 今年九月来録水云唐人海聘録水戸 才十卷小

寛文六年

福生七郎右衛門

元年二月十七日松本藩

下曾根三十郎

松本藩 福生氏 寛文六月二十日

松平甚三郎

福生氏 寛文六月二十日

但福生氏卒去小付天草以有之由河野實与長崎表為押書是之 下曾根氏ハ久留  
米ハ為治目付在勤之之由治下知之在長崎小来リ返治支配之之由田氏ハ内儀  
有内儀六月松平甚三郎宛リ書付所表到是付下曾根氏ハ由歸府

河野權右衛門

福生氏 寛文六月二十日

阿蘭陀船七艘入港

唐船三十七艘入港

一 二月十七日福生氏卒去當表光源与兼送法名孝山海忠大船也

一 當年ハ想町順當に定宿町附町始 才十卷小



一 去年誘遊の時の撞撞破故當六月誘遊也 中二巻小

一 八月十二日阿蘭陀人八人送來 中九巻小

寛文七丁未年

河野権右衛門

哉年十月十四日参書

松平甚三郎

九月廿日参

阿蘭陀船八艘入港

唐船二十三艘入港

一 巡見之役是時孫九郎并新右衛門吉山若志忠七月十四日参書同十七日参書

一 古科郷地巡見使言林又志忠向井八郎参書七月十二日参書同十七日参書

一 今年新入主七枚年胡解小日本の或具法亦化費後志忠法通治金紙

二十八人斬罪也

一 倉田次九郎の志忠長崎地月小埋植を以て該處用水を可令運送を依取

法免免今年小植作り始

寛文八戊申年

松平甚三郎

哉年十月廿日参書

河野権右衛門

九月十二日参



阿南院船九艘入港

唐船十三艘入港

一對馬より阿南院人七人送來

中丸巻小  
三つり

寛文九己酉年

河野権左衛門

秋年九月九日發信

松平甚之節

九月十三日迄

阿南院船六艘入港

唐船二十八艘入港

一 當年の古料日見村小笠村茂木村多地村大崎村松崎村以上六村治込

未次平蔵と碓田治信之

一 船給元初紙地給を歩を戻木板ホリ彫付出相用紙破を換し易に故今年

唐船漆板の船給二十枚出来中七巻小と云り

一 為上意當番の唐船造りの古船一艘新造造り付當年十二月船より始

寛文十庚戌年

松平甚之節

秋年九月九日發信

河野権左衛門

九月十三日迄



河内院船六艘入津

唐船二十六艘入津

一 去年治行(色)唐船造の古船一艘組六百名積當三月成就古船改當

地崎若市左馬(小)治行三月九日長崎港出帆し四月十日江府に着船す

一 六月大崎(小)洋中(古)破船を尾張の志士八人運來古船味し日本國(古)合陽帆(古)

寛文十一年亥年

河内院(古)松平氏(古)

牛込忠左(古)松平氏(古)

河内院船七艘入津

唐船三十八艘入津

寛文十二年子年

牛込忠左(古)松平氏(古)

長崎(古)河内院(古)八月九日(古)

河内院船七艘入津

唐船四十二艘入津

三月百(古)松平氏(古)小(古)松平氏(古)



一 昔年今秋多見町と今秋船小付十日所の各相合り七十七町と見しは神事

治統町一今年十一町見ると七年廻り小相動。

一 今年船番十七人新小治石抱之 才三巻小

延寶元癸丑年

九月七百改元

長野孫九郎

延寶九年九月廿六日迄

牛込右左衛門

九月十四日迄

今年東船番を三山に引移新に送る 才二巻小

阿蘭陀船六艘入港

唐船二十艘入港

一 是迄年行司役町人の内小相動と航向戻町し名の内小相動之 横濱町し名

横濱町し名

一 九月九日 籍厄利亞船一艘入港 才七巻

一 今年時の撞撞不今竜町と島地 才三巻小

一 去寛文七年倉田某依航水梅作事成就を以て今年小治運と銀

十枚宛と銀

延寶二甲寅年







延寶四内辰年

斗込忠九郎

延寶九月廿七日

長野源九郎

九月十六日

河内院船口艘入津

唐船七口艘入津

一 去年末次平茂家来家之船は江を為高賣唐國先悉し帆巻腰り船候

船後小付合滞留の船先年より日本に相圖し居る帆巻船中に入津する船松平

至辰辰念會より相賣出遊穿敷と帆被船二重座に據り日本の繪巻刀服掛

或具より賣後の船白帆を平茂首より取の船中候と相賣當二月十日松平

右取の流石候と當地船取候と先年平茂首に寄り黒田家来源由九郎系

人数百人余り候なり平茂子北三郎の丈村に流石重舟長福院に唐津に

流石重舟の平茂父子は小湊候に流石流石付名福院に流石小湊流石流

付忠徳の志は悉く斬罪とす

一 今年末次平茂流石流石付小付長崎に寄り流石流石は流石流石年号の内

商人加取に流石付

一 今年町役三人相増

延寶丁巳年

長野源九郎

延寶九月九日



牛込忠九郎

九月十日

河南院船三艘入港

唐船九九艘入港

一 城川黄壁山為末寺當表、重福寺建

一 修驗金花院建

延寶六戊午年

牛込忠九郎

延寶六年九月十日

長野孫九郎

九月十日

河南院船三艘入港

唐船二十六艘入港

一 七月十七日外浦町出火、因造設不の因、船燒、普徳成就の同安禪寺、

出引移中二書

延寶七己未年

長野孫九郎

延寶七年九月十日

牛込忠九郎

九月十日

河南院船三艘入港



唐船三十三艘入津

一 禅宗妙相寺建

延寶八年申年

八月八日家總公薨古德號嚴有院殿

牛込忠丸

延寶九年九月廿九日薨

川口源九郎

延寶九年九月廿九日薨

河南院船三艘入津

唐船二十九艘入津

一 當年夏屋町内地敷を修築するに高札場并移中三巻

一 六月十八日白飯肥津東也雲方分異國人十八人送來 中十二巻

一 今年十月廿七日海島島所候天材候ノ候無地出来梅ノ候 中二巻

一 神崎社建

天和元年丙午

九月十九日改元

總督公任征夷大將軍

川口源九郎

延寶九年九月廿六日薨

宮城 監物

牛込氏延寶九年十月廿



阿蘭陀船に艘入降

唐船九艘入降

一 巡見と使員由八節右事の戸川重と重保由七九事の七月廿日廿日十百五船

一 今年囑咤銀二百枚相指給合二百枚とす

一 近年少産米穀言事おめり給今年唐船入降粒女之儀此分限削減

小付銀元の事とす古枚米二百石ト一降

一 福海と意兵衛尚正月十七日午能中施漸を日を述べ凡三人後小

及之り以節治事行而少能と米五百石分の銀を相渡り給所施漸とす

一 小宗福と千敷和為九月十六日午能中施漸とす

一 八月廿日申刻二時半り段の方子坤の海陸述幅と云々とし白雲一節とす

天和二壬戌年

宮城監物

元年九月九日亥時

川口源九郎

九月十六日

阿蘭陀船に艘入降

唐船二十六艘入降

一 去秋より年々銀を以儀甚愛小宗福と相渡り給所施漸を以儀之儀云々寸寸の大谷

一 つ出来し別紙と遺物とす中上巻小

一 二月十九日申刻大雷降と重サ六七ト分を包中



一 七月末小慧星出現

天和三年夏

川口源左衛門

天和三年十月九日發書

宮城監物

九月十日日名

河内院船三艘入港

唐船二十七艘入港

一 二月信船を白屋町入帯の信條心へ御物

一 分所神社神宮寺の古所化取在は是の白屋唯一神社と古所 中記巻二

右寛永九年の天和三年迄共六十年



一、八月五日、

大正三年九月

川口

吉田

岡田

大正三年九月

在野村、

一、八月五日、



